

【図工で美術館に行きました】5/12

○5年生の図画工作の教科書（開隆堂出版）の開きには、国宝「風神雷神図屏風」が掲載されており「心を開いて見てみよう」と問いかけています。現在、平山郁夫美術館では「陶板再現！風神雷神図屏風」展が開かれており、絶好の機会と、5年生の児童が鑑賞に行かせていただきました。俵屋宗達と尾形光琳の風神雷神図屏風の陶板画が対で展示されており、発見したことを質問したり学芸員の幸野さんのお話を興味深く聞いたりしていました。

こんなに近くでじっくり見ることができる環境に感謝です



俵屋宗達と尾形光琳の風神雷神図を見比べながらギャラリートークをしました。



屏風の大きさの違いや、視線の違い、背景などいろいろな発見をしました。



なんとぜいたくな鑑賞でしょう。

屏風をたてて展示してある理由や、たたみが置いてあるわけなど、質問から始めて、学芸員さんの展示の思いにまで深めて教えてもらいました。



畳に座って見ることで、視点も見え方も変わります。その時代の人々の気分で鑑賞してみましょう。



児童の感想から

風神雷神の周りには、黒い雲かけむりのようなものがまとわりついている。風神と雷神の間には、大きな空間がある。風神雷神は、どちらの力が上なのかと戦っているように見えました。神やけむり（雲）は金色になって立体感を出していると思いました。

幸野さんは風神雷神の絵のことをいっぱい知っていて、絵のことをどんどん質問しても全部答えてくれて、すごいなと思いました。幸野さんの話を聞いていると、いろんな人がこの絵のことをひきついでできているのかな、と思いました。

昔から絵というものがあり、それを昔の人々が、石を粉にして絵の具にするなど、いろいろな工夫をしてえがいてきたものの中のひとつが、この風神雷神図ということだと思った。

同じ絵のように見えたけれど、よく見るとちがったところがたくさんあった。それはかいた人の思いがちがうし、かかれた時代もちがうからだと分かった。

二つの絵を見て、一つ一つ細かいところがちがったり、絵をかく材料などがちがったりしていた。昔の人々の絵の発想もすごいし、おもしろいのもっとくわしく知りたいし、関係のある話も調べてみたいと思った。